文献資料紹介《第61回》

【銭五の密貿易の行方について】

山本秀雄

もうかれこれ十四、五年も前、石川・富山両県のマスコミの方々が、取材のため屋久島に立寄ったことがある。目的は幕末、口永良部島で行われていたという密貿易についての調査で、加賀国金沢の人で当代第一の貿易家銭屋五兵衛の足跡を訪ねての来島であったが、戦果は挙らず、地元としても何とか資料を探すことに留意することになった。

今回は中から川島元次郎先生の『南国史話』(大正十五年、平凡社発行)に収載の本題を取り上げるが、加賀金沢で銭五の事件が発覚した折に、薩摩藩は密貿易関係資料を、口永良部の貿易所と共に焼却、証拠隠滅をはかったため、地元には英国人商館跡地を残すのみで、他一切を失い、裏付ける資料を見ない。

先日、一点、「口永良部白糖方」と書いた書類箱の裏書メモを発見したので紹介する次第。本文に合せて御覧を頂きたい。

口永良部島白糖方
当嶋江未[注1]七月廿五日罷下リ
能日　白糖方江相勤
元治元年子[注2]五月迄首尾能相勤
此節　御当地江罷〇置〇役儀御言上筈
相別条無之候　是ヨリ〇ニ音信書状之取納致
御此段以書置致候
碇山家　鹿児嶋千石馬場
事　嶋津鐵之介　内
鵜飼岩太郎盛富
当嶋白糖方
拂兼務勤

〔山本注1〕未＝安政六年(一八五九)？
〔注2〕元治元年子＝一八六四年。

銭五の密貿易船の行方を尋ねて

川島元次郎

◇銭五の密貿易に関する諸説
◇米大陸に通商したりとの説
◇最も信憑すべき一説
◇銭五の密貿易船坊津に入る
◇口之永良部島
◇口之永良部島の密貿易
◇薩藩の密貿易所と銭五の密貿易船との交渉
◇結論

加賀宮腰の豪商銭屋五兵衛が、前田家百萬石の威勢を背景にして、加賀藩用船の旗印厳しく、千石船を津々浦々に乗り廻はし、国産交易を名として潜かに国禁の密貿易を行うたといふことは、今更説くまでもない事実である。けれども其の密貿易を行うた場所は何処であったかといふに、或は千島の択捉島に於て露国の商船と交易したといひ、或は日本海の竹島(鬱陵島)に於て米国の商船と会合したといひ、或は三宅島八丈島から南下して南洋中に一孤島を発見し、之に「加州銭屋五兵衛領地」と刻したる標柱を樹て、之を銭五島と名つけて密貿易の根拠地となしたといひ、或は北米合衆国の西海岸に航して直接通商をしたといひ、漠然として捕捉する所なき有様である。勿論国禁の密貿易であるから、其の当時に於ては絶対秘密であって、銭五一家の者の機密に参与する者は五兵衛の三男要蔵と手代市兵衛あるのみであった。さうして初め加賀の国産を満載して宮腰を出帆した船は越前、長崎、大阪等の支店に至り、其処から特選された水夫が更代して乗組み、何処とも知らず海上遠く乗出すのであって、確かなる地点を知る者はない。仮令之を知って居てもそれを言明すれば我首に関はるのであるから他人に言ふべき筈がない。加賀藩に於て五兵衛等を捕へて糺明した時も、密貿易の事実を明かにすれば、前田家百萬石の威勢に傷が附く。何としても前田家に於ては其の財政の窮乏を救はんが為め、五兵衛に許すに加賀藩用船の名を以てし、旗印を授けたのであるから、其の加賀藩の旗印を掲げて密貿易をしたといふことになれば国禁に対する藩の責任は免れないのである。それであるから五兵衛及要蔵等が河北潟埋立の事件のみを審理して潟の中へ毒を入れ依りて多数の人命を失ふに至りたる事不届至極であるといふ点のみに就て処断し、両人を磔刑に処し、家財一切没収して其の罪跡を埋滅して了ったのであって、其の宣告文は一言半句も密貿易のことに及んで居ないのである。従って銭五の密貿易に関する事実は闇から闇に葬られて居る。況してや其の密貿易の場所が何処であったか、密貿易船の行方は如何といふことになっては空漠として捕捉し難いのは当然であるといはねばならぬ。

一世の快男児銭屋五兵衛の事蹟に就て従来公にせられたる伝記は少くない。其中最も信憑すべきものは金澤の陸義猶氏が経済雑誌に寄せられたる論文(経済雑誌七三九号〜七四一号)、及徳川三百年史に収載したる国府犀東氏の論文である。五兵衛が米大陸に通商したといふ説は国府犀東氏の論文に出て居るのであって、其の説の要は天保三年四月十一日五兵衛年六十二歳の時、二千三百石積の船に米、麦、大豆、小豆、砂糖、酒、醤油等を満載し、船夫十二人を率ゐて宮腰を出帆し、五月七日出羽の一港に着し、更に択捉に向つて航海中台風に遭ひ、大洋に漂蕩すること百二十余日の後、桑港の東方五里なるブレイタンの地に漂着した。此の時一行の中六人は死亡し、五兵衛及水夫六人は米人に救はれて辛じて生命を全うしたから烟眼なる五兵衛は早くも彼地の製造事業を視察し、欧米通商の実況を見て大に得る所あり、滞留数閲月の後米国の便船を得て其の年十一月伊豆の下田に着した。それから翌天保四年五月二日五兵衛は再び二千五百石積の太平丸に搭じ提燈、傘、竹杖、赤合羽、扇子、団扇の類を積込み三宅島へ航すると稱して宮腰を出帆し、一路太平洋を横ぎってブレイタンに着し、貿易を行うた。桑港の豪商フレンチ・アンクス深く五兵衛の胆略に服し、帰帆せんとするに臨み日本の開国を慫慂したが五兵衛は鎖国の国情を告げ、願くば二十年の後を俟てといひ、当時二十六歳なりし従僕他三郎をフレンチに託して帰港した。此の他三郎は名をフレデルストンと改め、久しく桑港に滞留し弘化二年米国使節の浦賀に来る時フレンチに従いて帰朝したといふのである。去りながら此の説に就ては著書国府犀東氏も之を疑ひ「五兵衛が北太平洋に遠洋航海を試み、竟に米陸に至りたりと云ふは伝者の多数が記載する所なれども、未だ之に関する正確なる考證を経るの機を得ざるを以て、其果して事実なるや否やは尚未だ断言

し易からざるものあり」といって居る。然るに大隅侯爵の編著に係る開国大勢史も亦此説を採り、国府犀東氏の文を摘録して「銭屋五兵衛は投機の一商売のみ、其の行状を評論するが如きは固より本書の目的に非ず、唯注意すべきは幕府の鎖国令あるに拘らず、遠くゼシュイット宗教の数学、天文学を輸入するあり、吉宗洋書の禁を解きたる以来蘭学の介助に因り大に此の二学の進歩を来し、其の結果として国民中之を航海術に応用するに堪ふる五兵衛の如き者を生じ、幕府政令の及ばざる海洋に於て外国貿易に従事するものありし一事是れなり。其の果して米船来航の素因たりしや否やは尚之が證明を他日に待つものあり」と記してゐる。国府犀東氏のやうに未確定の説を挙げて、それを前提として評論を下し、「若し果して五兵衛が天保の初を以て夙に米陸に交通を開きたるを以て信なりとせば、日本帝国々民の一人として五兵衛其人が文明の潮流を導きたるの功も亦偉大ならずと言ふべからず、五兵衛が米陸に交通したるが為に日米の貿易を開くべしとの決議は合衆国議会の上院下院を通過したり。亜米利加の黒船は浦賀の湾頭に浮出たり。孤立の国民は大打撃を受けたり。為政者は倉皇狼狽せり。処士は横説縦論せり。天下は鼎沸せり。覇府の封建制度は大破綻を生じたり。王政は興れり。開国進取の国是は定められたり。而して明治の新天地となりぬ。然らば則ち五兵衛が東洋の文明に貢献せる偉功亦偉大ならずとせんや」と大聲疾呼しても、其の前提たる五兵衛の渡米説が信憑すべきものでない時は折角の名文も何の役にも立たないのである。

私は銭五の渡米説に就て久しき以前から疑を抱いて居る。加賀藩士陸義猶氏が銭五事件の処置に親しく参与したる人々と加賀藩の歴史編纂主任者から直接聞き得たる材料に依り経済雑誌に寄稿せられたる論文には渡米説は全く載て居らぬ。陸氏は「世に銭五の事を伝ふる者一二のみならず、或は伝記に或は演劇に其の他遍く人口に噴説するもの亦復た少なからず、然れども是れ多くは其の由来する所根拠なく、唯浮説風聞を伝承するのみにして其の事実を得るもの殆ど十中の二三を保すべからず。蓋当時加賀藩に在て頗る幕議を憚り其の事実を秘して他漏を戒め、其の関係書類の如きも総て之を焚棄して其の迹を滅せしものに似たり。故に当時加賀藩人と雖も其の事実を明知するに由なく、後来に至ても亦其の記録の徴すべきものなし。則ち今の伝記若くは演劇に伝ふる所皆是れ訛伝俗説所謂針小を以て棒大にし、虚を以て実と為すものに過ぎず」といって居る。誠に正鵠を得たる論議である。陸氏が銭五の水夫であった清水九兵衛なる者の談を伝へて居るに依れば、嘗て一海島に着して土人と交易をしたが、其の島名も方角も知らぬ。唯極めて暖国であったことを覚えて居る。其の時丁度正月元日であったから船中で餅を搗て祝うたのである。初め大阪を出帆する時花降銀一萬両を交換し、之を船中に貯へて交易の資銀としたのであるが、此の海島から買取て来た品物は毛氈等の毛織物であって、帰路に大阪に於て悉く之を売却したといって居る。私は此の水夫の言に最も信憑すべき事実を含んで居ることを信じ、常に其の方面の注意を怠らなかったのである。

今年（大正十一年）三月十四日、私は薩摩の西南端なる坊津に遊びてゆくりなくも銭五の船が風待の為に時々入津した話を聞いた。さうして其の船は陸上の交通を避けて風波の収まるを待ち、瓢然として出帆し去るのであって、何処から来て何処に去るか知る人絶えてなかったといふ話を聞いたのである。（唐船の出入した坊津港参看）併しながらこれは銭五の長崎支店から船出して天草洋を経て此の坊津附近に来たのであって、征帆遠く去る処は南方の洋上であらねばならぬ。

坊津から南へ三十海里を航走すると硫黄島の噴炎を望見する。これは平家物語に鬼界島といへる島であって、治承の昔平判官康頼、丹波少将成経、俊寛僧都の流された所として人口に膾炙せる孤島である。其の硫黄島の噴炎を望んでから更に南方二十海里を航すると矢張り噴烟の濛々たる口之永良部島を見るの

である。口之永良部島は硫黄島の二倍大の島であって、東西三里南北一里、全島噴出岩より成り、主峰新嶽は島の南東に偏して聳え、高さ七百米突許常に噴煙を漲らせて居る。此の島は行政上大隅国熊毛郡上屋久村に属するのであって、主島屋久島は此の島の東七海里に在る。島の南西岸に湾入ありて口之永良部湾といひ、約二十尋の水深を有する好錨地である。水路志に依れば此島から以南宝七島に沿ひ奄美大島、琉球諸島に航する海路を七島灘といふのであって、九州と奄美大島との間に於ける錨地は口之永良部湾と屋久島の北西岸たる一湊とあるのみである。口之永良部湾は北西風を避くるに宜しく一湊は南東風を避くるに適するから航海者は天候を予察して此の二湾を利用するのである。口之永良部湾に臨んで全島の主邑本村がある。戸数百二十五人口六百七十と注せらるゝ。其の本村の西端海岸に御番所の跡と称する所がある。此処は大正八年より五十五年前即ち慶応元年の頃まで西洋館のあつた所であって、英国人が此処に住居して居たのである。さうして此の西洋館こそ薩藩の密貿易船と交渉のあつた秘密の建物であるのである。

薩藩の士川上久良といふ人が此の口之永良部島に渡り、六ケ月許り滞留した時、此の秘密の洋館に就て色々と調査した。さうして薩藩の密貿易船の水夫であつた元喜入村（揖宿郡）の鈴四郎助といふ者が、口之永良部島の向江浜（本村の東南に接する部落）に住して居るので、同人初め島の古老から事実を聴取り大正八年九月十五日之を記録して居る。此の記録に次の如き事項が記載されて居る。

一藩庁にては帆船をして日本海を経て北海道に航せしめ、昆布其他の海岸物を移入し来り更に鹿児島より米穀醤油の如きものを満載して口永良部に於て茲に仮住せる英人と交易したりと云ふ。

一其当時彼等の使用せる何物か在るならんと種々捜索せしも何物をも獲る所なかりき。

一之より先き加賀金沢に於て銭屋五兵衛なる者密貿易を営みしが、事露見に及びて遂に牢死するに至りしが、此事早くも我藩庁に聞へ同島の密貿易所たる英国人居住の洋館は唯一日にして取壊たれ用材の如きは何処にか木片すら残さず悉く持ち去られしと云ふ。斯る有様なれば貿易の趾を湮滅せんが為めに或は何物をも止ざらんことに努め器具其他当時を偲ぶべき物品をも総て棄却せしならんと云ふ。

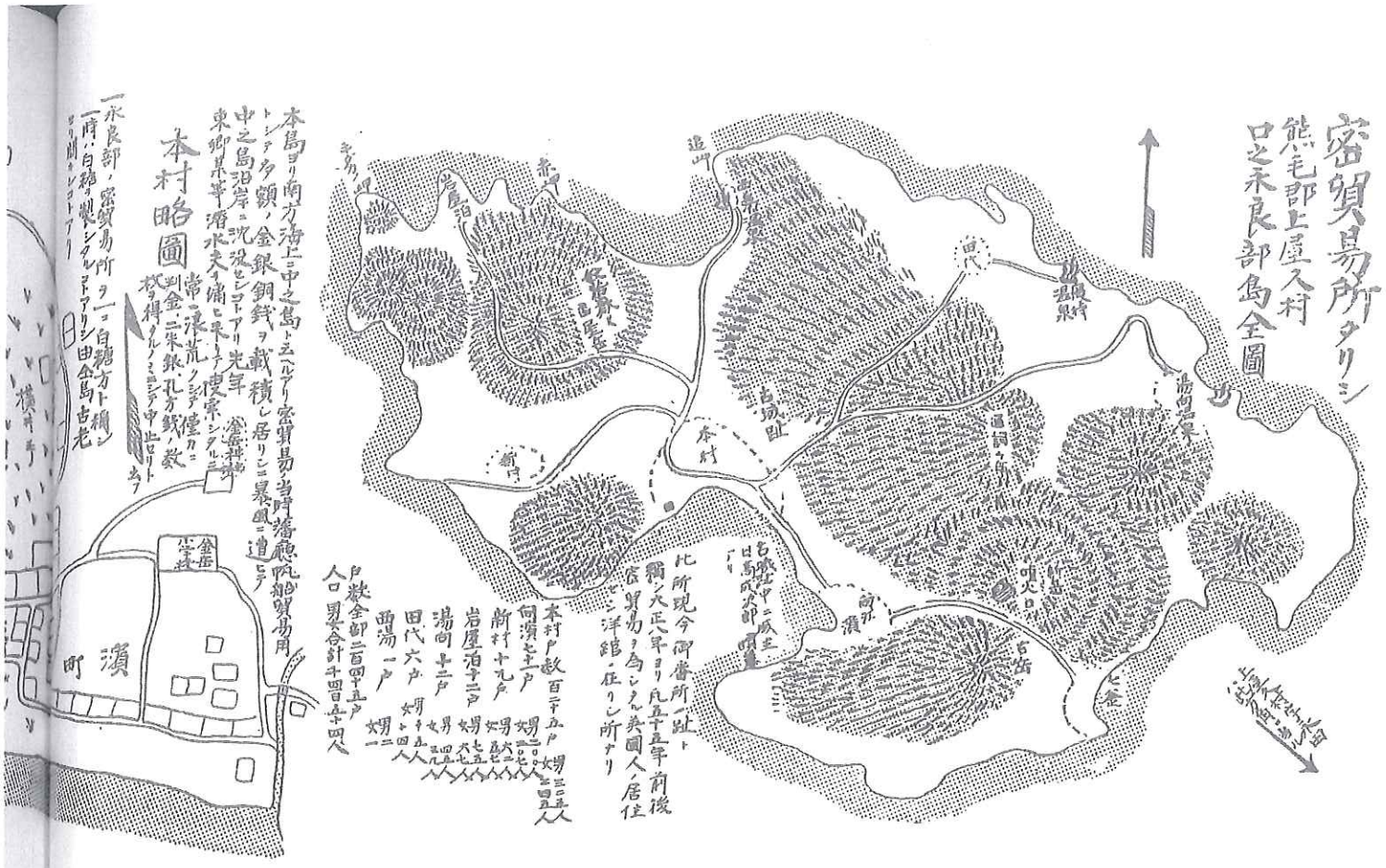
一当時英人の主任とも云ふべき者は同島の婦を入れて妾とせしと云ふ、今猶一人は生存し居れり。

一英人の飲料として携帯せしものは老婆等の談話に徴して麦酒、葡萄酒、ブランデーの如きものなりしが如し。

一永良部の密貿易所を一に白糖方と稱し一時は白糖を製したることありし由同島古老より聞きしことあり。

一本島より南方海上に中之島と云へるあり、密貿易の当時藩庁帆船貿易用として多額の金銀銅銭を載積し居りしに、暴風に遭ひて中之島沿岸に沈没せしことあり。先年東郷某等潜水夫を傭ひ来りて捜索したるに常に浪荒くして僅に判金、一朱銀、孔方銭の数枚を得たるのみにして中止せりと云ふ。

薩藩に於て密貿易をしたと云ふことは早い時代から知られて居る。唐船との密貿易は姑く措き藩庁の船舶が琉球方面に航海して西洋の物貨を齎し帰ったことは鹿児島の人は熟知して居る。開国大勢史の著者大隅侯爵も密貿易に従事したる薩藩士市来某と佐賀に邂逅した当時盛に密輸入の行はれたるは薬品であって、我が商人は之を小判と交易し大阪道修町の薬舗に売却したることを聞いたと記して居る。さうして文久三年英国艦隊が鹿児島湾を砲撃したる時拿捕したる薩藩の三汽船には一には銅貨を積み、一には絹布を積み、一には砂糖及び米を積載してあって薩藩が常に外国貿易を行って居たことを證して居る。去りながら薩藩の密貿易所が口之永良部島にあったといふことは全く知られて居なかったのであ



第十圖　川上久良氏記録

川上久良氏の記録

（本文中に引用ある部分を省く）

密貿易所タリシ
熊毛郡上屋久村
口永良部島全図

古城趾中二城主
日高戌次郎墳墓アリ

此所現今御番所ノ趾ト称シ
大正八年ヨリ凡五十五年前後
密貿易ヲ為シタル英国人ノ居
住セシ洋館ノ在リシ所ナリ

本村戸数百二十五戸
男三二五人
女三四五人

向浜　七十一戸
男二〇〇人
女二〇七人

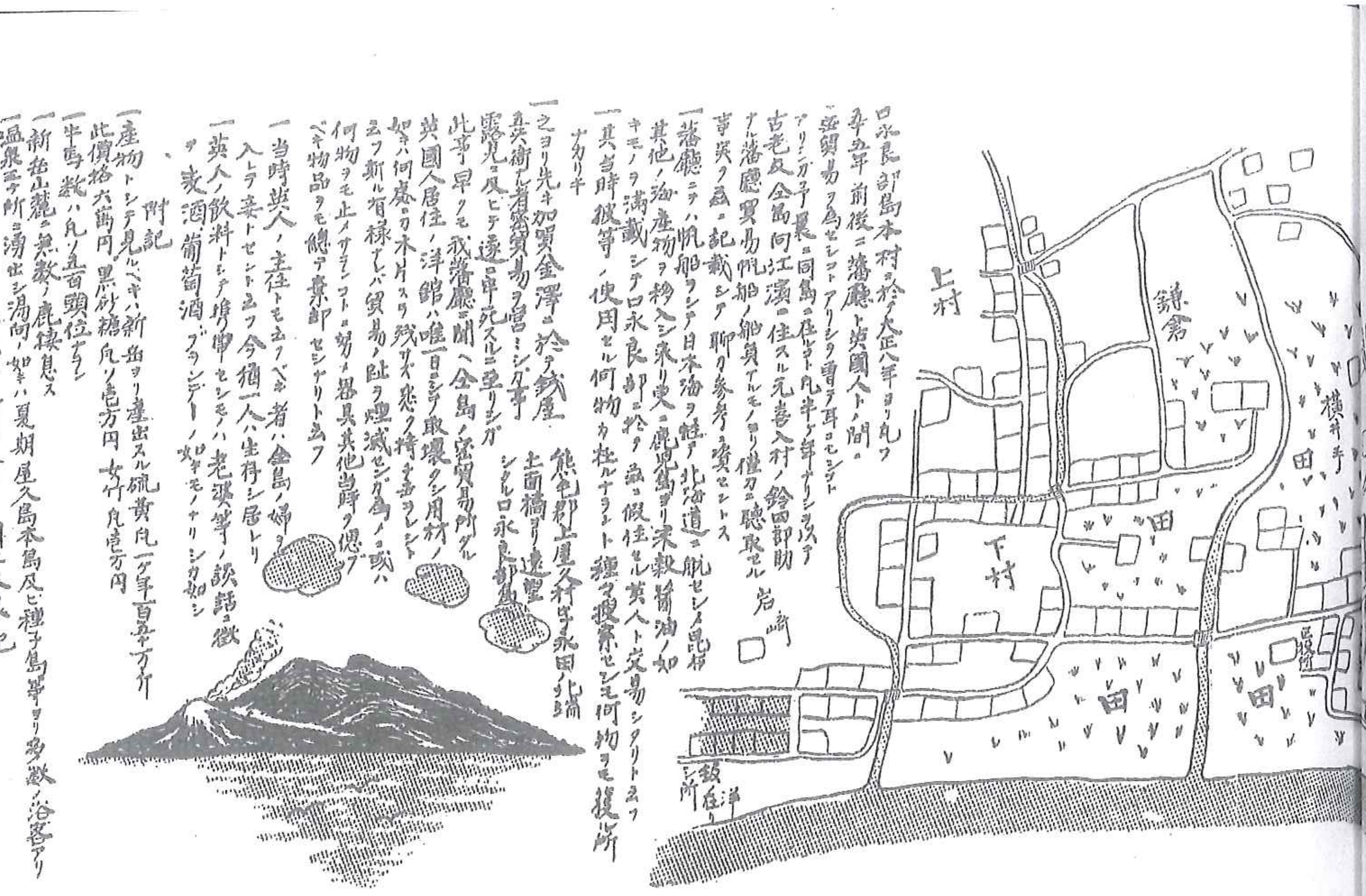
新村　十九戸
男　六二人
女　五七人

岩屋泊　十二戸
男　七五人
女　六七人

湯向　十二戸
男　四五人
女　三九人

るが、川上久良氏の記録によりて之を明かにするを得たるは会心の極である。

川上久良氏の記録は氏自ら描写したる口之永良部島の見込図、三葉と共に一面の額とし鹿児島図書館に寄贈したるものであって、私は奥田館長の好意に依りて之を同館員土橋氏に影写して貰った。川上氏の記する如く薩藩の帆船は日本海を経て北海道に航し、昆布其他の海産物を移入して居る。これが銭五の船と交渉あることを暗示して居る第一点である。銭五の加賀藩に捕はれて獄中に病死したるは嘉永五年十一月であって、要蔵等処刑せられて一件全く落着したるは翌六年十二月である。それから慶応元年迄十二年を経て居るけれども、薩藩が銭五の密貿易露見のことを聞て口之永良部島の洋館を一日の間に取壊たしめたと云ふことは銭五の船と交渉あることを暗示して居る第二点である。銭五の船が時々坊津に入津して風待をなし何処ともなく出帆したといふことが口之永良部島に交渉あることを暗示する第三点である。さうして銭五の密貿易船に乗組んで居た水夫清水九兵衛の談話に密貿易所は暖国の海島であったといふこと、花降銀と交換したる貨物は毛氈等の毛織物即ち欧州産の商品であったといふことが口之永良部島の英人と交渉あることを暗示する第四点である。川上氏の記録に口之永良部島の密貿易所を一に白糖方と稱し一時白糖を製した



録及口之永良部見取圖

田代　六戸　男　十五人
　　　　　　女　十四人
西湯　一戸　男　二人
　　　　　　女　一人
戸数全部二百四十五戸
人口男女合計千四百五十四人

附記

一産物トシテ見ルベキハ新岳ヨリ産出スル硫黄凡ソ一ケ年百五十万斤此価格六万円、黒砂糖凡ソ壱万円、女竹凡ソ壱万円

一牛馬数ハ凡ソ五百頭位ナラン

一新岳山麓ニ無数ノ鹿棲息ス

一温泉三ケ所ニ湧出シ湯向ノ如キハ夏期屋久島本島及ビ種子島等ヨリ多数ノ浴客アリ

大正八年九月十五日

川上久良記

ることありと記し、同島は現に黒砂糖を多く産出する。然るに陸氏の論文に依れば銭屋五兵衛は許多の舶来糖（今の棒砂糖）を有し、越後の菓子商と謀りて「越之雪」と称する菓子を新製したとある。之れ口之永良部と銭五と交渉あることを暗示する第五点である。私は此等の点から考察して銭五の密貿易船の航した所は、説者のいふが如き遠洋の彼方に在ったのではない、我国の領土内にある薩南の離島口之永良部島こそ其の秘密の地点であったのであらうと推断するのである。念の為に断って置くが私は此の推断を下す為に五兵衛が択捉で露国船と交易し欝陵島で米国船と通商したといふことまで否定しやうとするのではない。五兵衛の密貿易をした地点は口之永良部島一ケ所であると限定する意味ではない。私は銭五の渡米説に信を措かないで其の乗組水夫清水九兵衛の談話を信憑し、其の談話に適合したる地点は口之永良部島に外ならないことを主張するのである。

銭五の密貿易船の行方を尋ねて私は坊津から山川あたりそこはかとなく彷徨(さまよ)うた。さうして鹿児島図書館で川上久良氏の記録を発見して久しき疑問を解決することを得たのである。

【山本注】川上久良氏の父は明治の廃藩置県まで屋久島奉行を勤められた川上助八郎氏であった。